

お茶の水女大家政

湯沢雍彦

湘北短大生活科学

○中野洋恵

(目的) 産業構造の変化にともなって、漁村の家族においても家族の内部構造の変容は余儀なくされている。

本研究では、夫婦の構造と家族の意識がどのように変ってきたかを、13年前と比較することによって具体的に明らかにすることを目的とする。

(方法) 安乗に在住し、小学校4年生から6年生までの子どもを持つ主婦1,00人を対象とした訪問面接調査。

調査実施時期 昭和58年7月11日から14日。

(結果) 夫婦の権威構造類型をみると、「夫婦分業型」32%、「妻優位型」28%が目立ち、いずれも13年前より増加している。決定事項別には、子どもの小遣い額、しつけ、妻の身のまわりの品の購入、妻が仕事にでるかどうかなどに妻の決定権が強く、電化製品の購入、夫の小遣いは夫の決定権が強い。また、「老若一致型」「老親優位型」はともに減少し、決定権が相対的に親夫婦から子夫婦へと移行したことが明らかである。

「夫婦の間は平等である」と答えたものは46%で前回調査より10%増。平等を否定する理由には、たてまえ的否定が多く、実際には平等感が強い。これは、習慣に加えて、対象者の95%が職業に従事し、収入を得ていることが大きな要因と考えられる。